

②政庁東門（八脚門）の実施設計について

建物形式	八脚門、切妻屋根
構造	木造平屋建て
規模 東西	4.292m (2間)
南北	6.808m (3間)
高さ	4.760m
外構 東西	7.252m
南北	8.568m
その他	乱石積基壇、自然色舗装 東側基壇は低い階段設置、バリアフリーのためのスロープ設置 西側に巾 0.4mの雨落を設置
基礎	鉄筋コンクリートベタ基礎、柱は鉄筋コンクリート基礎の柱穴にはめ込み 遺構は、既存盛り土5cmと、遺構にかかる土圧軽減のため造成土と置き換えるエ スレンブロック 50 cmの計 55 cmの保護層により保護(エスレンブロックは志波城跡 で使用実績あり)
その他	南北に塀が2間ずつ付属 笠木横羽目板塀 高さ 2.370m 北側延長 3.998m、南側延長 4.884m

○整備上実施設計で追加した施設

戸受け石	普段は扉を解放しておく予定なので、扉が下がらないよう支えるため設置
柱の根巻銅板	柱の保護のため設置、柱の地上部3cm程度までとし目立たないように設計
方位板	政庁東門（八脚門）が東を向いていることを見学者が現地で確認できるよう設置
西側雨落ち溝	政庁内の雨が政庁東門（八脚門）に入り込まないように受けるために設置
西側踏み石	砂利敷の雨落ち溝を設けたので、門に入りやすいよう設置
東側階段	基壇の高低差を和らげ、昇降しやすくするため設置
スロープ	バリアフリー対策として設置

○使用予定材

選定基準：久留倍遺跡の建物での使用事例（コウヤマキ）

地方的な傾向（スギ）

耐久性（ヒノキ）

経済性（スギ）

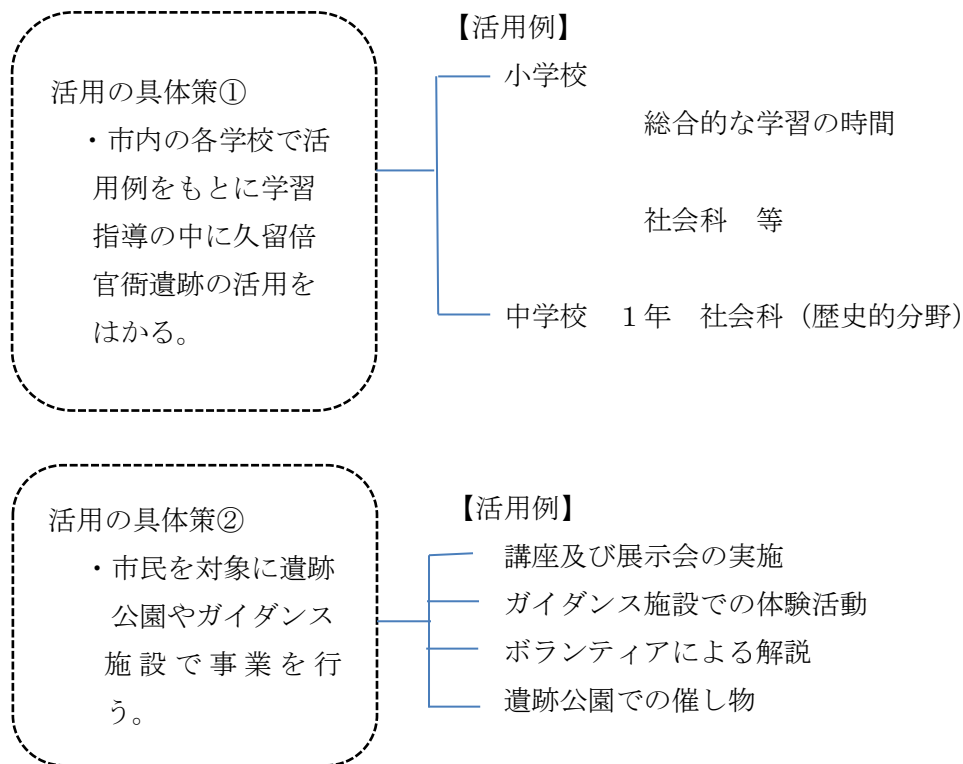
コウヤマキ	柱、塀横羽目板
スギ	屋根板、目板
ヒノキ	上記以外

### ③小中学校での活用計画について

市内の子どもたちに久留倍官衙遺跡を知ってもらうためには、学校での学習活動の中で本遺跡を取り扱ってもらうことが必要である。学校が有効に活用できるよう「久留倍官衙遺跡学習プログラム」作成のための編集委員会を設置した。

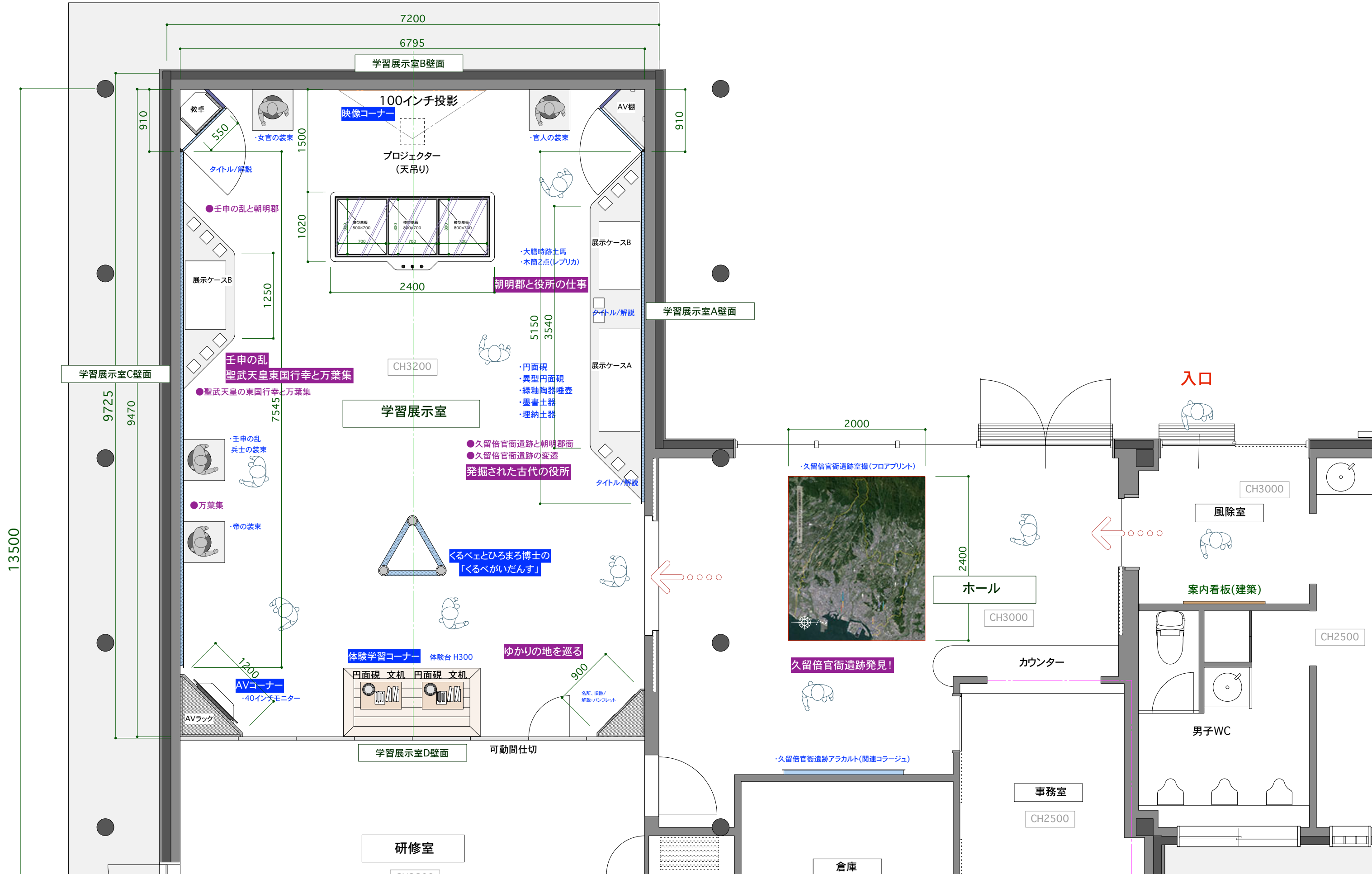
各学校の教育課程に久留倍官衙遺跡の活用計画を盛り込んでもらえるようにするため、学習プログラムは、久留倍官衙遺跡活用計画書の中に活用事例として掲載する。

#### <全体構想>



#### <スケジュール>

年度	編集委員会	教職員関係	小中学校
26年度	第1回	夏季研修会 (久留倍官衙遺跡講座)	出前授業
	第2回		
27年度	第3回	夏季研修会 (久留倍官衙遺跡講座)	出前授業 活用案を利用した授業実践 (大矢知興譲小学校・朝明中学校)
	第4回		
28年度	第5回	夏季研修会 (久留倍官衙遺跡講座) 学習プログラム案説明会 (各学校1名以上参加)	出前授業 活用案を利用した授業実践
	第6回		
29年度	第7回	学習プログラムについての研修会 現地見学会	出前授業 活用案を利用した授業実践
	第8回		
	活用計画書の編集最終確認 学習プログラム案のホームページ公開(教職員のみ)		
30年度	活用計画書の印刷	活用計画書の配付(教職員)	年間指導計画に活用案を導入 授業実践
	活用計画書のホームページ公開		



# く る べ かんが 久留倍官衙遺跡ガイダンス施設学習展示室パネル（案）

（章立てパネル）

## 序章 久留倍官衙遺跡発見！

平成 11 年度から始まった久留倍遺跡の発掘調査で、東を正面とする特異な官衙政庁<sup>かんがせいちやう</sup>や長大な建物、整然と並ぶ倉庫群など、古代の建物群を多数確認しました。平成 18 年には古代伊勢国朝明郡の郡衙跡である可能性が高いとして、国指定史跡「久留倍官衙遺跡」とされました。古代朝明郡は、672 年の壬申<sup>じんしん</sup>の乱<sup>らん</sup>や 740 年の聖武天皇の東国行幸<sup>ぎやうこう</sup>など、古代史を語るうえで重要な歴史上の舞台となった可能性が考えられます。

\*官衙…役所、官庁のことです。

\*郡衙…郡の役所（現在の市役所にあたります）。

（章立てパネル）

## 第 1 章 発掘された古代の役所—久留倍官衙遺跡—

伊勢湾を臨む丘陵の東部の先端に位置します。古代の朝明郡（現在の四日市市北部とその周辺地域）を治めた役所「朝明郡衙」跡と考えられます。

建物群は大きく 3 期に分かれます。Ⅰ期：7 世紀後半から 8 世紀前半には塀で囲まれた郡衙政庁、Ⅱ期：8 世紀中頃には長大な建物を中心とした施設群、Ⅲ期：8 世紀後半から 9 世紀末には溝で区画された倉庫群からなる正倉院、と時期により性格が異なります。とくに久留倍の建物群は東を向く点に特徴があります。

一方、Ⅰ期の建物群を、都と地方を結ぶ官道沿いに置かれた「駅家<sup>うまや</sup>」ではないかとする説もあります。

\*駅家…人馬を配し、公の使いに乗り換えの馬や宿舎、食料等を提供する令制の施設。

（解説パネル）

○政庁域は東西 50.32m、南北 41.44m です。模型表示。

建物群の変遷と各時期の特徴

○Ⅰ期（7 世紀後半から 8 世紀前半）

丘陵頂部から裾部まで遺構が検出されていますが、中心となるのは正殿・2 棟の脇殿・八脚門<sup>きやくもん</sup>を塀で囲んだ郡衙政庁です。

○Ⅱ期（8 世紀中頃）

Ⅰ期の郡衙政庁の後に建造された大規模な側柱<sup>がわばしら</sup>建物を中心とする建物群。長大な建物の中には聖武天皇の行幸に関する建物がある可能性があります。

\*側柱建物…外回りだけに柱を配した建物。

○Ⅲ期（8世紀後半から9世紀末）

区画溝で囲まれた複数の<sup>そうぼしら</sup>総柱建物で<sup>しょうそういん</sup>正倉院が形成されていました。

\*総柱建物…<sup>たかいゆか</sup>高床構造で1間ごとに格子状に柱を配した建物。

（手すりパネル）

遺物キャプション 須恵器、土師器、墨書土器、緑釉陶器

円面硯、埋納土器、緑釉陶器（唾壺）の説明、イラスト（復元含む）

○久留倍官衙遺跡出土遺物

円面硯、転用硯、異型円面硯、埋納土器（5点）、緑釉陶器（唾壺）、  
墨書土器

クイズ

○この土器は何に使ったのでしょうか。

緑釉陶器唾壺 本来の意味はつばを吐き入れる<sup>つぼ</sup>壺ですが、のちに実用性を失い  
『<sup>わみょうるいじゅうしやう</sup>和妙類聚抄』（平安時代の辞書）では<sup>ちやうどひん</sup>調度品の中に位置づけられています。

○円面硯の使い方

どこで墨を磨るのかな。どこに墨汁が溜まるのかな

古代の<sup>すざり</sup>硯の一形式。真ん中の平らな部分（<sup>おか</sup>陸）で墨を<sup>す</sup>擦り、まわりの溝（<sup>うみ</sup>海）に擦った墨をためて使います。

○<sup>はじき</sup>土師器と<sup>すえき</sup>須恵器の違いはなに

土師器は弥生式土器の流れを汲む土器で、古墳～平安時代まで用いられます。須恵器は5C.中頃から作られるようになります。同じく平安時代まで用いられますが、土師器に比べて硬く濃い灰色の陶器です。土師器はひも状の粘土を積み上げて作るのに対して、須恵器はロクロで成形します。焼き方も、土師器が野焼き（800°～900°）で焼かれたのに対して、須恵器は<sup>がま</sup>登り窯（1100°以上）で焼き硬くしまったものとなります。

○久留倍官衙遺跡が発見されたのは、何が原因だったのでしょうか。

（章立てパネル）

## 第2章 朝明郡と役所の仕事

この時代の日本は、天皇を中心とする国づくりが行われていました。大化2年（646）の改新の<sup>みことり</sup>詔以降、全国的に行政組織の整備が進められました。大宝元年（701）に完成した

大宝律令には、地方を国一郡一里（のちに郷）（現在の県一市一村に相当）と定め、拠点に国衙、郡衙などの役所が置かれました。

現在の四日市市は伊勢国の朝明郡と三重郡にあたります。

（解説パネル）

古代朝明郡

朝明郡は<sup>た</sup>び<sup>か</sup>・<sup>は</sup>せ<sup>つ</sup>か<sup>べ</sup>・<sup>ぬ</sup>か<sup>た</sup>・<sup>お</sup>お<sup>が</sup>ね・<sup>と</sup>よ<sup>た</sup>・<sup>く</sup>る<sup>べ</sup>の6郷（里）からなる郡で、久留倍官衙遺跡の名称は現在の字名によるもので、古代朝明郡の訓覇郷内に所在しています。また、郡内には古代朝明郡を支える生産・集落遺跡や寺院等の役所に関連する遺跡が多く発見されています。

映像へ

地図図面パネル（以下のものを盛り込む）

- （朝明郡・三重郡内郷名配置図、河川名、丘陵、久留倍官衙遺跡の位置、旧海岸線、三重県の縮小図（伊勢国・伊賀国・志摩国・紀伊国）
- 朝明郡（西ヶ広遺跡、菟上遺跡、大矢知山畑遺跡、大膳寺跡、縄生廃寺などの位置、遺構写真、代表遺物写真など）
- 三重郡（智積廃寺、貝野遺跡、宮の西遺跡、落河原遺跡、前山遺跡などの位置、遺構写真、代表遺物写真など）

ケース 遺物展示

- ・大膳寺跡 土馬
- ・西ヶ広遺跡 異型円面硯

（解説パネル）

郡司の仕事

朝明郡の郡司は、郡内の豪族から選ばれた<sup>だいりょう</sup>大領1人・<sup>しゅちょう</sup>少領1人・<sup>しゅちょう</sup>主帳1人が任命されていました。今でいうと、市長・副市長・会計管理者といったところでしょうか。

郡司の仕事は、民衆の支配、治安・警察権、戸籍の管理、租の徴収・保管・管理、庸（代納物）の取りまとめ、特産物等の調の送り出し等多岐にわたりました。そのため、少人数の郡司だけでは行えませんでしたので、正式な官人ではない<sup>ぞうにん</sup>雑人が数多く働いていました。

建物の変遷と仕事

I 期

正殿は儀式などに使われた建物で、その前の広場も含めた空間で儀式や祭祀が行われました。脇殿では日常の事務などが行われたのでしょう。また、八脚門は寺院や宮城などでも用いられた形式の門です。

## II期

一般的には、側柱建物は稲穂が付いた状態の稲（穎稻）を蓄える屋と呼ばれる建物で、蓄えた稲は出挙に用いられました。建物前の広場はその作業の場所として使われました。そのほか、丘陵の裾部には厨等とみられる建物も検出されています。

\*出挙…稲の種もみを貸付け、利息を取る制度。

\*厨…調理などを行うところ。

## III期

総柱建物には、脱穀した稲が保管されました。税として正倉に納められた稲穀は飢饉等の非常時に用いりましたが、和銅元年（708）8月、朝廷から不動倉が奨励され、正倉が満載になると封印され、鑰は中央に送られ厳重に管理されました。

\*不動倉…いっぱいになると封をして中身を出し入れしない倉。

（解説パネル）

### 民衆と税

民衆には、戸籍をもとに租・庸・調などの税負担が年代別に課せられました。租は6年に1回の班年に6歳以上の男女に口分田が支給され、収穫から3%程度の米が徴収されました。

\*班年…口分田が支給される年。

\*口分田…令制下で民衆に支給された農地。

<キャプション>展示している木簡（複製）は、三重郡から調として送られた黒鯛に付けられたものです。

（税表イラスト）租・庸・調、防人、運脚、出挙・・・

正倉に荷を入れ込んでいるイラスト（朝明郡衙）

※伊勢国の庸・調の説明 根拠は何か（どの書物に書いてあるのか）

（手すりパネル）

### 木簡って何？

当時、紙は貴重であったため、代わりに木に文字を書く「木簡」が多く使われました。事務仕事には、筆と硯と書いた文字を削る刀子（ナイフ）が必須の道具でした。

（イラスト） 役人の仕事の様子

（手すりパネル）

### 木簡の種類

内容から、文書・荷札・歌木簡などに分類できます。

荷札木簡は、切り込みを入れて荷物に括り付けるか、先をとがらせて荷物に挿して用いました。税として納める荷物に付けられ、地名や、品名、数量、年月日などが記され送り

出されました。

(手すりパネル)

荷札木簡の移動

荷札木簡は、税を取りまとめた郡衙で付けられて、国衙から都に送られて、用を終え廃棄されるか、表面を削られ再利用されます。そのため、多くの荷札木簡は、都が置かれた地域で出土しています。写真の木簡は朝明郡（評）から都へと運ばれた荷物に付けられたものです。

※イラスト製作 何か参考になるものをそのまま模倣する

① (明カ)  
評

② 伊勢国朝明郡褥多里

③ 伊勢国朝明郡

④ (表)伊勢国朝  
(裏)伊勢国朝  
(明カ)

① の「評」とは大宝令制前の郡の表記です。読みはいずれも「こおり」です。「明」の文字の付く郡名は朝明郡以外にはありませんので朝明郡の古い表記です。

② 「褥多里」は額田里で、「ぬかたのさと」から運ばれたものです。

③・④ ともに朝明郡から出された木簡です。

クイズ

○木簡とはなんでしょう

(章立てパネル)

### 第3章 壬申の乱と聖武天皇の東国行幸

古代の朝明郡は、「壬申の乱」や「聖武天皇の東国行幸」にゆかりの地です。また、『万葉集』には行幸の際に詠まれた歌が収められています。それらとも関係する久留倍官衙遺跡は、考古学や古代史のみならず『万葉集』の研究でも大いに注目されます。



(付属パネル・イラスト)

○皇統表 舒明・皇極～称徳天皇

○壬申の乱、聖武天皇東国行幸の行程図

- ・壬申の乱（吉野宮滝遺跡、名張横川、大津宮、瀬田唐橋、夏見廃寺・・・）
- ・聖武行幸（平城宮第1次大極殿写真、河口頓宮、赤坂頓宮、不破頓宮、禾津頓宮・・・）
- ・四日市市（県指定史跡天武天皇迹太川御遥拝所跡、糠塚山、市指定史跡聖武天皇社、

志氏神社、鏡ヶ池・・・）

(古代史年表)

(解説パネル)

壬申の乱の勃発

『日本書紀』によると、大海人皇子（天智天皇の弟）は、仏道修行のため吉野に移り住んでいました。天皇の崩御後、大友皇子（天皇の子）側が軍備を整えているとの報がもたらされ、大海人皇子は挙兵を覚悟し、ここに皇位継承をめぐる内乱が勃発しました。672年6月24日（太陽暦で7月24日）、大海人皇子は妻の鸕野讃良皇女（後の持統天皇）とわずかな供を連れ、吉野を脱出しました。乱は最終的には大海人皇子側が勝利し、天武天皇として飛鳥浄御原宮に即位しました。

(解説パネル)

壬申の乱と朝明郡

6月24日、大海人皇子一行は吉野から伊賀国へと脱出しますが、そこは大友皇子の母の出身地、敵地を強行突破し伊勢国へ入り、25日の夜、豪雨の中、三重の郡家に到着し、建物1軒を焚いて暖を取りました。翌26日の朝、朝明郡の迹太川の辺で天照大神を望拝しています。そこへ近江から脱出してきた大津皇子が合流し、朝明郡家に入ろうとすると不破道の封鎖に成功したことが伝えられます。大海人皇子は、郡家に入ると、高市皇子を不破に遣わすとともに、各地の軍をおこさせています。朝明郡は、壬申の乱において重要な舞台となりました。

\* 不破道…現在の岐阜県不破郡関ヶ原町。大海人皇子は美濃国の領地を管理する多臣品部に不破道を塞がせました。ここを塞ぐことにより、近江朝廷側の東国への連絡路を絶ちました。

○関連遺物

軒丸瓦（智積廃寺出土）、専仏（智積廃寺出土）、唐三彩舍利容器（繩生廃寺出土）

(解説パネル)

『日本書紀』

720年に天武天皇の皇子である舎人親王らにより編纂された、神話の時代から持統天皇の治世までを記した漢文体の史書。

### 『<sup>しよくにほんぎ</sup>続日本紀』

797年に菅野真道らにより編纂された、文武天皇から桓武天皇の治世途中までを記した『日本書紀』に続く漢文体の史書。

### 『<sup>まんようしゅう</sup>万葉集』

大伴家持らが編纂した、7世紀後半から8世紀後半ころにかけて、天皇、貴族、下級官人、防人などさまざまな身分の人が詠んだ歌を4500首以上集めた日本に現存する最古の和歌集。編纂された当時は、仮名文字がなかったため、歌を記すために漢字の音を借りた万葉仮名が用いられています。

#### (解説パネル)

##### 聖武天皇の東国行幸

天平12年(740)、聖武天皇は10月から12月にかけて伊賀・伊勢・美濃・近江・山背へと行幸されました。九州では藤原広嗣の乱が勃発している最中であり、騎兵400人を徴発し、多くの皇族や貴族とともに平城宮を出発。不破で騎馬軍を解いて、12月には恭仁京へ遷都します。この行幸は綿密に計画され、赤坂から不破までは曾祖父である天武天皇の壬申の乱を追体験したものと考えられています。久留倍官衙遺跡のⅡ期、8世紀中頃の長大な建物を中心とする建物群の中に、行幸で宿泊した朝明郡に関連した施設がある可能性があります。

##### 聖武天皇の東国行幸と朝明郡

この行幸の途中、一行は11月23・24日の両日朝明郡に滞在しています。『続日本紀』には、「朝明郡に到る」と記し、『万葉集』には「朝明の<sup>あんぐう</sup>行宮」、「狭残の<sup>きざ</sup>行宮」と記しています。

\*行宮…かりみや。天皇が一時的に滞在する宮殿。「<sup>とんぐう</sup>頓宮」とも。

#### (解説パネル)

##### 聖武天皇の行幸と万葉集

『万葉集』には、1ヶ月半におよぶこの行幸の際に詠まれた歌8首が収められています。その内4首が現在の四日市市域にかかわるもので、聖武天皇や大伴家持らの詠んだ歌が収載されています。天皇は朝明郡に2泊されており、大伴家持の2首は朝明郡の狭残の行宮で詠まれたと記されています。

古代の海岸線は、現在よりも1kmほど内陸に入り込んでいたようで、久留倍官衙遺跡から海までは2kmと近い距離にありました。現在のように高いビル等が無かった当時、久留倍から伊勢湾を望む景色は、さぞ風光明媚であったことでしょう。

(三重郡)

聖武天皇 「妹に恋ひ吾の松原見渡せば潮干の渦に鶴鳴き渡る」(巻6 1030)

(朝明郡)

丹比屋主真人 「後れにし人を思はく四泥の埒木綿取りしでて好往とそ念ふ」(巻6 1031)

大伴家持 「大君の行幸のまにま吾妹子が手枕まかず月そ歴にける」(巻6 1032)

「御食つ国志摩の海人ならしま熊野小舟に乗りて沖辺漕ぐ見ゆ」(巻6 1033)

### 【行幸随行人】

橘宿祢諸兄

塩焼王(氷上塩焼、行幸時の御前長官、恵美押勝の乱の際に天皇候補に)、

石川王(御後長官)

大井王、中臣・忌部ら(大神宮奉幣使)

智努王

長田王

守部王

道祖王(孝謙天皇の最初の皇太子)

安宿王・黄文王・山背王(長屋王の子ども)

矢釣王

茨田王

藤原朝臣仲麻呂(前衛騎兵大將軍、恵美押勝)、

紀朝臣麻呂(後衛騎兵大將軍)

大原朝臣高安

紀朝臣麻呂

下津道朝臣真備(吉備真備)

阿倍朝臣吾人

多治比真人牛養(奈良麻呂の乱で処罰)

大伴宿祢祐信備

百濟王全福

阿倍朝臣佐美麻呂

阿倍朝臣虫麻呂

藤原朝臣八束(藤原真楯 藤原房前の子、大納言になる)

多治比真人木人

民忌寸大楯

藤原朝臣清河(房前の子、遣唐大使)

橘宿祢奈良麻呂(橘諸兄の子)

菅生朝臣古麻呂

紀朝臣鹿人  
宗形朝臣赤麻呂  
引田朝臣虫麻呂  
物部依羅朝臣人会  
高麦太  
大藏忌寸広足  
倭武助  
村国連子虫  
当麻真人広名  
紀朝臣広名  
笠朝臣蓑麻呂  
小野朝臣綱手  
枚田忌寸安麻呂  
秦前大魚  
文忌寸黒麻呂  
日根造大田  
守部連牛養  
酒波人麻呂  
壺師君族古麻呂

聖武天皇・元正太政天皇・光明皇后

騎兵、東西史部・秦忌寸ら 400 人

留守 鈴鹿王・藤原朝臣豊成

以上、続日本紀

大伴家持・丹比屋主真人

以上、万葉集

エピソード ゆかりの地を巡る（章立てパネル）

久留倍官衙遺跡周辺の「壬申の乱」や「聖武天皇の東国行幸」にゆかりのある史跡や資料館を巡りませんか。

各地の展示施設をご案内します。

○なぜ、政庁は東を向いているのでしょうか。

この土地を支配した船木氏の祖先神、大田田神が「日の神を出だし奉る」という祖先功業伝承によるという説や、壬申の乱の折に大海人皇子が朝明郡の迹太川のほとりで天照大神（太陽）を望拝したことに由来するとする説など諸説があります。

○大海人皇子が望拝した川はどこでしょう

\* 迹太川については諸説（朝明川説・十四川説・米洗川説など）がありますが、海蔵川説、三滝川説が有力でしょう。東大寺の荘園「三重荘」の四至（境界線）の中で東西は判然としませんが、南限を遠川としており、北限を「河多良河」と「阿久良河」の誤記とすれば、遠川=迹太川=三滝川となります。海蔵川説は、古くは海蔵川と三滝川は河口付近で合流しており、そこが三重郡と朝明郡の郡界であったがために「朝明郡迹太川」と記され、三重荘は上流では分流しているため海蔵川と三滝川（遠川）の間ということになるというものです。

○なぜ壬申の乱が起きたのでしょうか。

・ 従来より、偶発説と計画説があつて、乱をいかに見るかによりますので解決していません。天智天皇が大海人皇子を病床に呼び寄せて譲位を申し出ますが、大海人皇子はそれを辞して天皇の病氣平癒を願うため、出家して仏道に励むため吉野に向かいます。『日本書紀』にはある人の言として「虎に翼を着けて放てり」と記しています。その後、天皇がなくなることにより、近江朝廷側と大海人皇子側との間に緊張関係が生じたことでしょう。

○聖武天皇はなぜ東国行幸を行ったのでしょうか

\* 東国行幸の目的…従来は広嗣の乱を恐れて逃げ出した等の説が多く行われていましたが、近年では河口までを恭仁京遷都を神宮に報告する目的、赤坂から不破までを壬申の乱の追体験、不破以降を恭仁京遷都としてとらえる見方が有力です。

#### 【久留倍情報コーナー】

○ようこそ久留倍官衙遺跡へ 史跡地の見所

○まだまだなぞがいっぱい 久留倍官衙遺跡

- ・ なぜ、政庁が東を向くのか  
祖先神の功業、太陽望拝、道に向いている  
郡衙と駅家
- ・ 後れにし人  
都に置いてきた妻  
大津皇子 壬申の乱との関係

※可能性を入れ込み、久留倍の解釈を広げる

○ほかの郡衙遺跡、頓宮遺跡

○久留倍官衙遺跡発掘の変遷など

サイズ：2900×1500 Scale=1/10

CH

# 序章 久留倍官衙遺跡発見！

平成11年度から始まった久留倍遺跡の発掘調査で、東を正面とする特異な部  
衙（ぐんが）政庁（せいちよう）や長大な建物、整然と並ぶ倉庫群など、古代  
の建物群を多数確認しました。平成18年には、古くは伊勢国朝明郡の郡衙跡であ  
る可能性が高いとして、国指定史跡久留倍官衙遺跡とされました。古く朝  
明郡は、672年の壬申（じんしん）の乱（らん）や740年の聖武天皇の東  
国行幸（ぎょくこう）など、古代史を語るうえで重要な歴史上の舞台となっ  
た可能性が考えられます。

\*官衙：税所官庁のこと。  
\*部衙：郡の税所現在の市況にありません。



丙午。從赤坂發至朝明郡。

『続日本紀』聖武天皇（天平十二年十一月）

丙戌。且於朝明郡迹太川邊望拜天照太神。

『日本書紀』天武天皇（元年壬申）

御食つ国志摩の海人ならしま熊野小船に乗りて沖邊漕ぐ見ゆ  
大伴宿祢家持『万葉集』

項目	前代		本代		中代		後代		近世		現代	
	年代	特徴	年代	特徴	年代	特徴	年代	特徴	年代	特徴	年代	特徴
官衙跡	7世紀後半	部衙跡	7世紀後半	部衙跡	7世紀後半	部衙跡	7世紀後半	部衙跡	7世紀後半	部衙跡	7世紀後半	部衙跡
倉庫群	7世紀後半	倉庫群	7世紀後半	倉庫群	7世紀後半	倉庫群	7世紀後半	倉庫群	7世紀後半	倉庫群	7世紀後半	倉庫群
土塁	7世紀後半	土塁	7世紀後半	土塁	7世紀後半	土塁	7世紀後半	土塁	7世紀後半	土塁	7世紀後半	土塁
石造	7世紀後半	石造	7世紀後半	石造	7世紀後半	石造	7世紀後半	石造	7世紀後半	石造	7世紀後半	石造
瓦葺	7世紀後半	瓦葺	7世紀後半	瓦葺	7世紀後半	瓦葺	7世紀後半	瓦葺	7世紀後半	瓦葺	7世紀後半	瓦葺
土器	7世紀後半	土器	7世紀後半	土器	7世紀後半	土器	7世紀後半	土器	7世紀後半	土器	7世紀後半	土器
銅器	7世紀後半	銅器	7世紀後半	銅器	7世紀後半	銅器	7世紀後半	銅器	7世紀後半	銅器	7世紀後半	銅器
鉄器	7世紀後半	鉄器	7世紀後半	鉄器	7世紀後半	鉄器	7世紀後半	鉄器	7世紀後半	鉄器	7世紀後半	鉄器
金器	7世紀後半	金器	7世紀後半	金器	7世紀後半	金器	7世紀後半	金器	7世紀後半	金器	7世紀後半	金器
銀器	7世紀後半	銀器	7世紀後半	銀器	7世紀後半	銀器	7世紀後半	銀器	7世紀後半	銀器	7世紀後半	銀器
ガラス	7世紀後半	ガラス	7世紀後半	ガラス	7世紀後半	ガラス	7世紀後半	ガラス	7世紀後半	ガラス	7世紀後半	ガラス
陶器	7世紀後半	陶器	7世紀後半	陶器	7世紀後半	陶器	7世紀後半	陶器	7世紀後半	陶器	7世紀後半	陶器
漆器	7世紀後半	漆器	7世紀後半	漆器	7世紀後半	漆器	7世紀後半	漆器	7世紀後半	漆器	7世紀後半	漆器
布	7世紀後半	布	7世紀後半	布	7世紀後半	布	7世紀後半	布	7世紀後半	布	7世紀後半	布
紙	7世紀後半	紙	7世紀後半	紙	7世紀後半	紙	7世紀後半	紙	7世紀後半	紙	7世紀後半	紙
骨	7世紀後半	骨	7世紀後半	骨	7世紀後半	骨	7世紀後半	骨	7世紀後半	骨	7世紀後半	骨
石	7世紀後半	石	7世紀後半	石	7世紀後半	石	7世紀後半	石	7世紀後半	石	7世紀後半	石
土	7世紀後半	土	7世紀後半	土	7世紀後半	土	7世紀後半	土	7世紀後半	土	7世紀後半	土
植物	7世紀後半	植物	7世紀後半	植物	7世紀後半	植物	7世紀後半	植物	7世紀後半	植物	7世紀後半	植物
動物	7世紀後半	動物	7世紀後半	動物	7世紀後半	動物	7世紀後半	動物	7世紀後半	動物	7世紀後半	動物

3,000

1,500

FH

原 始			古 代										中 世		近 世		近 代		現 代															
旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	飛鳥時代					奈良時代					平安時代	鎌倉時代		室町時代		安土・桃山時代	江戸時代		大正時代	明治時代	昭和	平成									
	紀元前 8000年頃	紀元前 300年頃	300年頃	538年	593年	645年	663年	672年	694年	701年	710年	712年	720年	723年	740年	743年	784年	794年	1192年	1221年	1274年	1281年	1338年	1467年	1590年	1600年	1603年	1716年	1876年	1889年	1914年	1941年	2004年	2017年
狩猟・採集の生活	初めて土器が焼かれる 日本列島ができる 弓矢の使用	稲作・金属器が伝わる	大和政権が誕生 近畿地方に大きな古墳が造られる	女王卑弥呼が邪馬台国を統治する 各地にクニができる クニどうしの争いがおきる	藤原京遷都 壬申の乱 白村江戦い 大化の改新 聖徳太子の摂政 仏教が伝来	大和政権が誕生 近畿地方に大きな古墳が造られる	長岡京遷都 東大寺大仏建立の詔 聖武天皇、伊賀・伊勢・美濃国に行幸する 長屋王の変 『日本書紀』完成 『古事記』完成 奈良に都が造られる(平城京遷都) 大宝律令の制定	武士が台頭(源氏・平氏) 荘園が各地に広まる 藤原氏の摂関政治・院政 京都に都が造られる(平安京遷都)	源頼朝、鎌倉に幕府を開く	元寇(弘安の役) 元寇(文永の役) 承久の乱	足利尊氏、京都に室町幕府を開く	徳川家康、江戸幕府を開く	関原の合戦で東軍勝利 豊臣秀吉が全国統一	徳川家康、江戸幕府を開く	大政奉還 享保の改革	第1次世界大戦 大日本帝国憲法の発布	久留倍官衙遺跡史跡公園オープン 久留倍官衙遺跡が国史跡に 太平洋戦争(〜45)																	

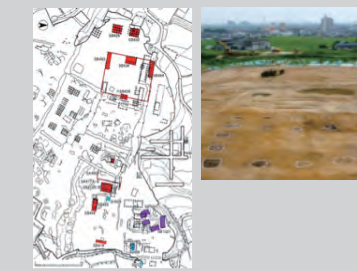


第1章 発掘された古代の役所 — 久留倍官衙遺跡 —

建物群の変遷各時期の特徴

伊勢湾を臨む丘陵の東部の先端に位置します。古代の朝明郡現在の四日市市北部とその周辺地帯を治めた役所朝明郡衙跡と推定されます。...

●1期(7世紀後半から8世紀前半) 丘陵頂部から都部まで遺構が検出されていますが、中心となるのは正殿(せいてん)・2棟の脇(わき)殿(でん)・八(はつ)脚門(きやくもん)を備えた郡衙政庁です。



●11期(8世紀中頃) 1期の郡衙政庁の後に建造された大規模な側柱(がわばしら)建物を中心とする建物群。長大な建物の中には聖武天皇の行幸に際する建物がある可能性があります。...



●13期(8世紀後半から9世紀末) 区画溝で囲まれた複数の総柱(そうばしら)建物で正倉院(しょうそういん)が形成されていました。...



第2章 朝明郡と役所の仕事

古代の朝明郡

朝明郡は田光・杖部・額田・大金・豊田・訓磨郷の6郷(里)からなる郡で、久留倍官衙遺跡の名称は現在の字名によるもので、古代朝明郡の訓磨郷内に所在しています。

郡司の仕事

朝明郡の郡司は、郡内の豪族から選ばれた大領1人・少領1人・主帳1人が任命されていました。...

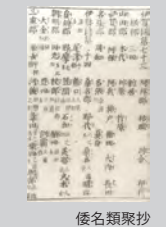


建物の変遷と仕事

1期 正殿は儀式などに使われた建物で、その前の広場も含めた空間で儀式や祭祀が行われました。...

2期 一般的には、側柱建物は稲(いな)種(ほ)が付いた状態の稲(穎(えい)稲(とう)を蓄える屋(おく)と呼ばれる建物で、蓄えた稲は出挙(すいこ)に用いられました。...

3期 総柱建物は、脱穀した稲が保管されました。税として正倉に納められた稲穀は飢饉等の非常時に用いられましたが、和銅元年(708)8月、朝廷から不動倉(ふどうそう)が奨励され、正倉が満載(まんさい)になると封印され、鑰(かぎ)は中央に送られ厳重に管理されました。



民衆と税

民衆には、戸籍をもとに租・庸・調などの税負担が年次別に課せられました。租は6年に1回の班年に6歳以上の男女に年齢に応じて口分田が支給され、収穫から3%程度の米が徴収されました。...



●木簡の種類

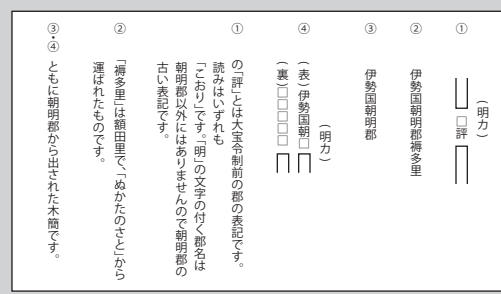
内容から、文書・荷札・歌木簡などに分類できます。荷札木簡は、切り込みを入れて荷物に括り付けるか、先をとがらせて荷物に挿して用いました。...

●木簡って何?

古代では紙はとても貴重であったため、代わりに木の板に文字を記す「木簡」が多く使われました。当時の事務を行う役人の必須の道具は筆と硯と、消しゴム代わりに木の表面の文字を削る刀子(ナイフ)でした。

●荷札木簡の移動

荷札木簡は、税を取りまとめた都衙で付けられて、国衙から郡に送られて、用を終え戻されるか、表面を削られ再利用されます。そのため、多くの荷札木簡は、郡が置かれた地域で出土しています。...



展示ケース

展示ケース

<キャプション> 展示している木簡(複製)は、三重郡から調として送られた黒簡に付けられたものです。(税表イラスト)租・庸・調、防人、運脚、出挙・・・正倉に荷を入れ込んでいるイラスト(朝明郡衙)

1,500

1,800

600

